

D-1 乳幼児の入室時適応過程について(第1報)

東京家政大児童 宮崎照子 伊藤正子 松重明子 笠原優子

目的 乳幼児保育が重要視されている現在、未分化といわれている乳幼児が家庭から、ほびの保育所又はナースリールーム等の異った環境、保育者の変化におかれ、子どもの側に心身ともにさまざまな変化を生じることが、或程度認められる。これについて保育者は乳幼児が環境の変化に一日もはやく適応していかれるように、常に心掛けている。そこで、入室時の生活の中からどのように適応していくかの過程を観察し、その結果を入室時の乳幼児の保育に役立てていきたいと思った。

方法 生後2ヶ月～2歳までの乳幼児を対象に入室時の行動観察記録からその適応過程を生態学的に分析した。

結果 乳幼児の月令別によって適応過程がちがうが、どの月令においても精神的、身体的に何らかの変化を示している。そこには個人差が非常に影響しているが、時間の経過とともに対人関係、主として保育士-子関係がよくなることにより安定をとりはじめていることがはっきりしている。これらのことから、保育者は0、1、2歳児を受け入れる場合の配慮として集団の一員として扱うのではなく、乳幼児一人一人の生活行動を重視して、円満な保育士-子関係、子どもの仲間づくり、社会的適応などを積極的にすすめていくことが大切であるといえよう。